



特集

卒業・修了

祝 卒業・修了

輝け! 長岡技大生!! 更なるステップへ!!!



CONTENTS

- 2 学長告辞
- 4 卒業・修了を祝して
- 6 贈る言葉／卒業・修了にあたって
- 19 退職にあたって
- 28 卒業・修了者数／編集後記



NUT 30
Nagaoka University of Technology
with Anniversary

2006年10月1日
開学30周年を迎えます。

「志の高い技術者」を目指せ



長岡技術科学大学長

小島 陽

卒業生・修了生の諸君、おめでとう。

本日、ここに、平成17年度の卒業式・修了式を迎え、学士、修士そして博士の学位を得た諸君に心からお祝い申し上げます。また、諸君をこれまで長年にわたり育て、支えてこられたご家族に御礼とともにお祝い申し上げます。

諸君は、この地、長岡での学生時代に、多くの自然災害に見舞われました。2004年7月には、三条・見附において200年に一度といわれた集中豪雨、そして猛暑の夏、さらに10月23日の新潟県中越地震、冬には19年ぶりの豪雪などにより多くの被害を蒙りました。特に、地震体験のない留学生の諸君は、地震後しばらく、恐怖の毎日を過ごしたことと思います。また、今年の雪は例年になく早く降り出し、津南町などで大きな被害が出ました。大自然は日常の我々の生存に対し、いろいろなことを教えています。被害のあることはそれに対する防備が出来ていないためです。備えあれば憂いなしを教えています。「新潟県中越地震」からは、大きな教訓を得ました。学生・教職員の安否確認の遅れ、2日間にわたる停電への対処など危機管理に対する意識の希薄さが実感され、大いに反省させられました。

昨今、大きな事件・事故が連日、新聞、テレビ等で報道されています。三菱ふそう欠陥

車事故、耐震偽装事件、ライブドア事件、東横インの無断改築などプロの職業人、経営者のモラル低下、モラルハザードが目立ちます。コンプライアンス（法令順守）すなわち企業倫理が問われています。これから社会人となる諸君は、「志の高い技術者」を目指してください。おかしいと思うこと、疑問に思うことを口に出し、それを正していく行動を起こしてください。これにはたいへんな勇気と努力が必要ですが、諸君自身で主体的に考え、善し悪しを判断して、実行できる人になってください。「見えるものより、見えないものを大切に」という言葉が、聖書にあります。「地位や財産や肩書き持つ“偉い人”ではなく、理想や情熱、心を豊かにもった“立派な人間”、“志の高い人間”」になってください。

元旋盤工で作家の小関智弘氏は言っています。「技能は何か、というのはそれぞれ違うけれど、日々の仕事で、蓄積されたものである。普段は意識しないが、全く新しい仕事に来て何とかしなきゃと思った時、フッと対策が思いつく。マニュアル通りの手順でやるだけなら職人ではなく、機械要員である。自分で工夫する面白さを見つけるまでは辛抱するように」と。また、米長邦雄・永世棋聖は、「勝利の女神は謙虚を好む」と本に書いています。人生行路は常に平坦な道だけではありません。逆境のときは苦しいが、これを克服したときには

長岡技術科学大学
大 学 歌

中村千栄子 作詩
岩河 三郎 作曲

天と地の恵み豊かに 信濃川
越の夾と いまも 悠悠
いざ友よ 若き瞳とありよ
遙かなる源泉にあり
漕ぎよせ 友よ
果て知れぬ 英知の海へ
大いなる 技術の海へ

紫の雲を閉きて 東山
雪の朝に やがて 明明
いざ友よ 若き生命を燃やせ
新しき技術の炎も
彩れ 友よ
日本の夜明けの空を
健やかな 世界の空を

あ あ われら
長岡技術科学大学

大きな喜びがあり、貴重な体験を得られます。
この体験を重ねることにより人は成長します。

さて、本学では、この4月からわが国最初のシステム安全専攻の専門職大学院を開設します。JR福知山線脱線事故、JR羽越線脱線事故、回転ドアによる子供の死亡事故など大きな事故が発生しました。わが国の安全神話が崩れようとしています。安全・安心な社会の再構築が必要です。欧米では、人間はミスをするものとの立場に立ち、ミスや誤動作があっても、事故にいたらない対策をとり、その対策でもカバーできない部分についての安全教育に依存しています。一方、わが国では、主として安全教育により人間のミスを防ぐことが安全対策の基本としており、根本的に安全に対する考え方が違います。

誤操作や誤作動があった場合でも、災害や事故に至らない安全システムを構築するためには、ハードとソフトの両面、すなわち、システム技術とシステムマネジメントから、「システム安全」のアプローチが不可欠であり、新たに設置する専門職大学院でそのための人材養成を行います。

また、本年10月1日には、開学30周年を迎えます。本学は昭和51年に新構想の大学院大学として発足しました。この30周年を一つの区切りとして、初心に戻り、次の時代の更なる発展に向けて邁進する所存です。

善因善果、悪因悪果、原因のないところに結果はありません。結果だけが出来てくることは絶対にありません。麦の種を蒔けば麦が出ます。麦の種を蒔いて米が獲れることはありません。志を高く、まっすぐ生きてください。如何なる逆境に立っても考え方によって、これが将来の基となります。すべて物ごとは善意に解釈しましょう。物ごとは前向きに考えましょう。自分自身を苦しめることは愚の骨頂です。幸せは誰にもあります。幸せだと思えないところに不幸せがあります。感謝の心のない人や、常に不平を言う人に幸せは訪れないものです。

いよいよ、旅立ちの時となりました。諸君の未来は、洋々たるものであり、諸君、自らが切り開いていくことができます。諸君が、本学のVOS精神に則り、努力、勤勉、責任感をもった社会人となり、大いに活躍されることを期待します

留学生の諸君。故国を遠く離れ、言語・文化の異なる地での生活、学習には大変な苦労があったかと思います。諸君の努力に敬意を表すとともに、さらに研鑽を積んで、それぞれの故国の発展に力を尽くすことを祈念して祝辞といたします。



荻生徂徠の「上役学」

理事・副学長
(入試・学生、財務担当)

西澤良之

学生の皆さんの修了・卒業を心よりお祝いします。

自分自身の経験を振り返って考えてみても、卒業、特に大学を離れるという時は、大きな転機であったように感じられます。人は、「誕生」から始まり、「最後の時」を迎えるまで、さまざまな「転機」を経て、生きていくわけですが、そのような転機の時に、ちょっと立ち止まり、過去を振り返り、また、次の目標を見定める時間を取ってみることも必要なのではないかと思います。

皆さんは、本学で、本誌の名前にもなっている、Vitality, Originality, Services = V O S のスローガンの下、「実践的・創造的能力を備えた指導的な技術者」を目指して研鑽を積み、めでたくこの日を迎えられたわけです。それは、本学がそれぞれの段階において習得すべきものとして定めた、一定の課程を履修し終えたことの証であります。誇りと自信とをもってこれからの人生に立ち向かっていただきたいと思います。

そこで、次のステップで何をを目指すのかということが一つの課題になります。

卒業・終了後、就職をしたとして、「指導的技術者」たらんとすれば、指導的立場について考えてみる必要があるということです。その場合の一つのヒントをあげてみます。

江戸時代の漢学者に、8代将軍徳川吉宗の助言者などもつとめた、荻生徂徠(1666~1728)という人がいますが、その人の「上役学」といわれるものがあります。

一、人の長所を初めより知らんと求むべからず。

人を用いて初めて長所の顕わるものなり。

二、人はその長所のみを取らば即ち可なり。

短所を知るを要せず。

三、己が好みに合う者のみを用うる勿(なか)れ。

四、小過をとがむる要なし、ただことを大切

になさば可なり。

五、用いる上は、そのことを十分に委ぬべし。

六、上にある者下にある者と才知を争うべからず。

七、人材は必ず一癖あるものなり。器材なるが故なり。癖を捨てるべからず。

八、かくして良く用うれば、事に適し時に応ずる程の人物は必ずこれあり。

古文調で書かれていますので、多少分かりにくい所がありますが、解説を付け加えることはやめておきたいと思います。繰り返し読んでみると、なんとなく理解できるようになるのではないのでしょうか。

技術開発の現場などに入り、何年かするうちに、好むと好まざるとにかかわらず、技術者集団などの上に立ち、その指導力を試される時がきます。そんな時に備えて、いろいろなことを幅広く考えておくことが大切だと考えます。

こういう事柄を本当に身に付けるには、経験を積み重ねることが必要不可欠です。経験に裏打ちされた知識が、指導力を発揮しながら、問題を解決したり、特定のプロジェクトを完遂したりする上で、大きなキーファクターになることは、NHKの「プロジェクトX」などを観ているとよくわかります。

しかし、矛盾することを言うようですが、このような経験の積み重ねや、身に付けた知識が、逆に、問題の本質的な解決を妨げてしまうことがあることも忘れてはなりません。それは、我々が直面する事柄が、過去の事例にそっくりだったとしても、実は全く別の、新しい事柄である可能性が高いからだと思います。

このことはまさにマニュアル頼りの危険性を示しています。先に述べた荻生徂徠の教訓も万能薬ではありえないことを承知しておいてください。



長岡市長

森 民 夫

互尊と独尊

長岡技術科学大学を卒業・修了されるみなさん、おめでとうございます。学業生活の節目を迎えられるみなさんに、心からお祝いを申し上げます。

“考え出す大学”で創造性豊かな教育を受けられたみなさんは、限らない可能性を秘め、今、新たなスタートを切ろうとされています。それぞれの道で大いに活躍されますことを期待いたします。

みなさんが研鑽を積まれたここ長岡市は、市町村合併により今年1月、人口約28万3千人、面積約840平方キロメートルの新・長岡市として新たな一步を踏み出しました。この合併の基本理念は「共存共栄」です。各地域が長い歴史の中で培ってきた固有の文化や伝統をはじめとする地域らしさを失うことなく、互いに尊重しながら競い合い、刺激し合うことにより、新市全体の活力を高めていくことを目指しています。

この共存共栄の精神は、大正時代、長岡市に図書館（現在の互尊文庫）の建設資金を寄付した野本恭八郎翁（現在の長岡市小国町出身）が唱えた「互尊独尊」思想に相通じるところがあります。翁の唱えた「互尊独尊」とは、「共同体を構成する構成員がそれぞれ確固たる個性を持ち、自らを愛することが何よりも重要である。そして、互いに異なる個性があるからこそ調和があり、自らを愛する心があるからこそ相手を愛することができる」ということを表した言葉です。

今日、私たちが国際化社会の一員として生きる上で大切なキーワードの一つがこの「互尊独尊」ではないかと思えます。

私はかつて建設省の国際協力プロジェクトで2年間北京に赴任していたことがあります。その時のことです。中国人の自己主張の強さ

に、当初、ストレスがたまることが多かったのですが、それに慣れてくるにつれ、付和雷同せず、自分の個性を強く打ち出すという意味で、かえって気持ちの良い面もあることに気づきました。日本ではとかく自己主張が強いとわがままと受け取られがちな面があります。そのため、周囲を気にして自分の意見を言わず、まわりに調子を合わせてしまいがちです。また、日本人ほど他人と個性が異なることを気にする民族はいないといわれます。その点、中国も欧米の社会も、意見や個性の違いにおおらかで、人間はもともと考え方も個性も千差万別なのが当たり前だと考えているようです。自分の自己主張が許されるならば他人の自己主張にも寛大になれるものです。互尊独尊は、国際的にも通用する思想として、これから国際化社会を生きるみなさんにぜひ大事にしていただきたい心構えです。

長岡市は一昨年、中越大震災と7・13水害という未曾有の大災害に見舞われました。在学中、被災された学生のみなさんも大勢おられたことと思います。災害からの復興はまだ緒についたばかりで、その道のりは長く厳しいものになりますが、たとえどんな困難があろうと、単に以前と同じ状態に戻すのではなく、災害をバネに地域の活力を高める「創造的復旧」を着実に成し遂げていく所存です。そして、その歩みを情報発信するとともに、復興した姿を支援してくださった全国のみなさんにお見せしたいと考えています。

卒業・修了生のみなさん、青春の一時期を過ごされた長岡市をいつまでもこころのふるさととしてください。そして、今後とも全国各地あるいは世界各地から長岡市を見守り応援してください。長岡市民もみなさんの大いなるご活躍を心から応援しています。

卒業・修了を祝して

贈る言葉

想定内,想定外

卒業、修了おめでとう。学部3年生あるいは修士1年生のときの中越地震を乗り越えて、この日を迎えられましたこと、感慨もひとしおと思います。自宅やアパートが被災し、勉強に集中できない日もあったでしょう。これから社会人になったとき、この経験が役に立ってくれると思います。

皆さんが入っていかれる社会には、変革があります。身に付けられた、Vitality, Originality, Servicesが生かされ、試される場です。いつも「想定内」のことばかりではありません。「想定外」のことも起こるでしょう。そのときには、「こんなとき織田信長ならどうするのだろう、秀吉なら、家康なら、どう考えるのだろう」というように、まっ

たく違う立場から考えてみてください。これら武将の発想、組織論、戦略論などはよいヒントを与えてくれるでしょう。過去に学び、自分のOriginalityに幅をもたせせる糧を見出していくことが、皆さんを強くしていってくれると信じています。この地で得られたよい友人たちもいます。大学で得た知識、友人など、たくさんの武器もっています。

変革の時代に対処していくことは大変ですが、見方を変えればそれだけチャンスがあるということです。自然災害を乗り越えられた皆さんには、困難を乗り越えられる力が十分蓄えられています。活躍を期待しています。

機械系長

宮田 保 教



卒業・修了にあたって

卒業にあたって

奥村 大介
(京都府立桂高校出身)
機械創造工学課程4年



「卒業にあたって」という文章を書いてください、と依頼されたので長かった学生時代を振り返って見ました。

やはり初めは雪の多さに驚きました。こんなところによく人が住んでいるものだな、と思ったものです。冬はそんなのですが、春は花見、夏は海といったように非常に自然に恵まれているので次第に長岡のことを故郷のように思うようになってきました。一生長岡に住んでもいいかな、と思ったことも何度もあります。

大学生活では、勉強と遊びの両方の面で非常に多くの友人に恵まれた、と思っております。先に卒業して行った者やまだ学校に残る者もおりますが、みんなかけがえのない存在だと思います。この友人達との出会いこそが、長岡技大に入学して卒業するまでの一番の収



研究室の飲み会です。僕は、右から4番目の横向いてる奴です。

穫だと思えます。

最後になりますが、私の研究室の教員である、明田川正人助教授には、とても言葉では言い表せないくらいお世話になりました。ありがとうございます。また、どんなときでも支えてくれ、また温かく見守ってくれた両親に深く感謝したいと思います。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

センスのいい人

松山 貴佳
(岐阜高専出身)
機械創造工学専攻2年



時間がたつのは早いもので、あっという間の4年間でした。図書館に集まったの試験勉強やアルバイト、長岡花火に越後のお酒など、楽しい思い出がいっぱいあります。

ところで、私はここ数年間「センスのいい人」とはどんな人かということに折に触れ考えながら過ごしてきました。せっかく紙面を頂いたので、これについて少し書いてみようと思います。

まず、senseを辞書で引くと「感覚能力」とあります。感覚能力が優れていると、センスがいいということになるわけです。では感覚能力が優れているとはどういうことなのか。普通の2つの野球ボールについて面白い話を聞きました。ある選手は「2つとも同じだ」と言ったそうです。ところがイチローは「こちらの方が湿気を多く含んでいるからわずかに重い」とコメントしたそうです。このような鋭い観察力があつたからこそあのような大記録が生まれたのに違いないと、この話を



ソフトボール大会にて

聞いたときに思いました。プロジェクトXなどを見ていると、優れた業績を残した人は物事を他人よりも良く観察していると感じます。「鋭い観察力を持って判断し、それを生かすことのできる人。」それが「センスがいい人」に対する現在の私なりの定義です。そういう人になれるよう、これからも精進していきたいと思います。

最後にお世話頂いた先生方、研究室の皆さん、友人、家族に心から感謝します。本当にありがとうございました。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

3年半を振り返って

ナッタボン タンヤラット
(タイ出身)
機械創造工学専攻2年



私は留学生です。タイから参りました。早いもので、日本に来てもう3年半がたちました。自分が思っていた以上に、この3年半はあっという間に過ぎました。日本では、本当にいろいろなことを勉強することができました。

日本へ来る前にタイで2ヶ月ほど日本語を勉強しました。来たばかりのころは日本語でコミュニケーションをとることが難しかったですが、今では日本語で話すことが出来るようになりました。長岡での生活に慣れるまでいろいろな問題があり、それを解決するために研究室の先生、研究室の皆さん、留学生の先輩、留学生係とむつみ会の方々が相談にのってくれたので、すぐに日本の生活に慣れました。

修士1年のころは授業にいっぱい出て、日本語の講義、専門の講義、ゼミナールと、とても勉強になりました。修士2年で、自分の研究を始めました。毎週、研究室



研究室の仲間達です。僕は右から2番目です。

の皆さんに発表をして、分からないことは皆さんとよくディスカッションしました。

4月から日本で就職することになりました。外国での就職活動は面白かったです。これから日本のビジネス社会を勉強して頑張りたいと思います。

最後に、先生方、研究室の皆さん、今までお世話になった方々、そして両親に心から感謝します。今まで本当にありがとうございました。

贈る言葉

アジアで光る技術者になろう

まずは皆さん、卒業・修了おめでとうございます。社会人として、または大学院に進学してからの新生活における更なる飛躍をおおいに期待しています。

このところ日中関係、特に文化的・歴史的な軋轢が取り沙汰されることが多いようですが、昨年はそのような状況のなか、二度ほど中国に行く機会がありました。他のアジア諸国と同様に、相変わらずの喧騒と熱気あふれる雰囲気は圧倒されると共に、急激な巨大経済の成長と産業の目覚ましい進歩を目の当たりにしてきました。

中国の大学では非常に勤勉で真面目な学生の姿が目につきました。専門の勉強だけでなく、積極的なコミュニケーションの研鑽に励む姿もいたるところで見ることが出来ました。彼らは13億人の中のエリートたちです。もはや日本人が日本人であるというだけでアジアのリーダーとなれる時代は終わったと感じました。

しかし急激な発展を遂げるアジアや世界の中で、未だ

電気系長

高田 雅介



日本が優位性を保っている分野があります。それは科学技術です。科学技術の蓄積は、一朝一夕で追い抜けるものではありません。新たな技術を産み出すための十分な基礎的な訓練と多くの研究の蓄積、そして何よりこれほどチームワークが必要とされる分野はないからです。

その苦勞と重みは、既に皆さんの身体に宿っているはずです。それこそが本学が皆さんに授けた"V O S"の精神であり、世界で活躍できる技術者となれる証なのだと思います。

今後、中国を中心としたアジアの経済・産業の発展が見込まれていることは誰もが予想するところであります。その激しい競争の中にあっても皆さんは指導的立場となれる力を持っています。そのことを忘れず、本学での貴重な経験を糧に、世界的な広い視野を持った実践的・創造的技術者として活躍してください。心から期待しております。

卒業・修了にあたって

学部

大学での2年間を振り返って

電気電子情報工学課程4年
志田 崇
(長岡高専出身)



月日というのは早いもので、気付けば技大に編入してから2年が経とうとしています。3年、4年と試験やレポートに追われ、いつの間にか時間が過ぎていたという感じがします。今ふと考えてみれば、自分ももう20歳を過ぎ、社会へと踏み出す時がやってきました。

大学生活を振り返ってまず思い出されるのは、研究室旅行です。冬にスキー旅行、秋には県外への旅行と、そういった経験があまりなかった私にはどちらも楽しい旅行でした。

また、一昨年には災害が多く起こった事も記憶しています。中越地震、水害に大雪、さらに昨年末には、大停電もありました。中越地震の時には、長岡よりも新潟寄りにある実家も揺れ、長岡周辺にいる友人のことが心配になったことを覚えています。また、水害のときには大学にいる時に河川氾濫の話聞き、帰りは高速を使って帰りました。その途中で見た、湖の中？と思える様な周辺一帯が水浸し



研究室スキー旅行(下段一番左が自分です)

の光景は今でも覚えています。最近の停電の際にはテレビもストーブも使えず、私達の生活にはこんなにも電気が結びついているのか、と思い知らされました。

他にも様々なことが思い出されますが、それらは辛かった事だけでなく楽しかった事も多くあります。

最後に、お世話になった先生方、友人、研究室の先輩方に心より感謝致します。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

感謝

松 下 晋
(木更津高専出身)
 電気電子情報工学専攻2年



小さい頃から憧れていた「大学院」をどうやら修了することができました。これで、長かった学生生活もいよいよ終わりかと思うと感慨深いものがあります。振り返ってみると、よくぞここまでやってこられたと思います。高専時代、技術の道を志したものの、思うように身に付かず、「自分にはこの道は合っていないのではないか?」という自問を、「技術なんて人類の幸福に役に立たないのではないか?」などという不屈きな言い逃れにすり替えて自己弁護していたこともあります。「役に立つ立たないではなく、役立たせるのが技術者の仕事」という考えに至るには時間を要しました。

この長岡での二年間は、本当に多くの方々に、助けられ、励まされ、支えられてきました。初めての雪国、初めての一人暮らし、不安もたくさんありました。中越地震もありました。研究もいっぱいいっぱいでした。そんな中でも、それなりに楽しんでやってこられたのは、やはり良



2005年春,研究室のお花見にて

い仲間に出会えたからだと思います。今、後輩の皆様伝えておきたいのは、友人との思い出をたくさん作ることを、物事に行き詰まっても必ず出口があることを信じて、あきらめない事、そして、自分の夢を捨てない事です。私自身、これから、自分が受けた恩を少しでもお返ししていけるように、そして社会に還元していけるようにやってきたいと思っています。本当にありがとうございました。

卒業・修了にあたって

大学院博士後期課程

充実の学生生活

久保田 健吾
(豊田高専出身)
 エネルギー・環境工学専攻5年



長岡での学生生活は多くの良き友人に恵まれ、また素晴らしい先生との出会いがあり、非常に充実したものでした。長岡には七年滞在しましたが、そのうち六年もの月日を費やした研究活動は私の長岡を語る上では欠かせません。その中でも、国内外の学会は刺激的でした。土木学会では三度も優秀発表賞を受賞でき、経験を積むための機会を数多く与えてくださった先生方には、本当に感謝しています(同賞がH7年度に創設されて以来3回の受賞は多分私が唯一無二かと思います・・・)。また私は、学会は学びや人との出会いの場としてだけではなく、様々な土地を楽しむ良い機会だと考えています。というか、楽しまないと損です。タイでは誤って踏み込んだちょっと怪しいマッサージ店のかわいい女の子に、一瞬いけない方向に持っていかれそうになりました。また、激マズのドリアンチューブを頬張る外国人研究員を見て、超えられない味覚の壁も実感しました。メキシコではスカイブルー



マヤ遺跡にて。ここで組体操をした人はいないはず。。。

のカリビアンリゾートで、マリンスポーツやマヤ遺跡を堪能するなどして、日頃の地獄の生活を十二分に還元させて頂きました。

こんな私ですが博士課程への進学に際して、「人間は負けたら終わりではない。辞めたら終わりなのだ。」というリチャード・ニクソンの言葉を机の前に掲げました。以来、幾度となく私を支えてくれました。これからも負けを恐れず、そして諦めず、いろいろな事に挑戦していきたいと思えます。

贈る言葉

柔軟な時間

卒業・修了おめでとうございます。入学してから、本学で多感な時代を過ごし、新たな扉を開くべく夢を持ち巣立っていく諸君に、心からお祝い申し上げます。

今日、諸君が日ごとと違って特に意識することは、人生のひとつの区切りであり、振り返って見るこれまでの過去とこれから向かう未来を繋ぐ「時間の流れ」や「時間の存在」ではないでしょうか。誕生の瞬間から時間が絶対的な尺度としてあるものの、節目、節目にそれを感じる程度で、誰に対しても、1日24時間が公平に分配され、その長さは同じと思いきみ通常は、時間について何の考えも感慨も持ちません。しかし、年月を重ねるごとに、時間の質が変わるように感じられるのも、また確

化学系長

井上 泰宣



かです。若いときの時間は、いくらでも取り出せて使いこなせて柔軟であるのに、時を経るごとに、それが困難となり、時間そのものが融通が利かず硬くなるように感じられます。これは、若い時には、事態が予想外に変わる展開でも俊敏に対処できることや、自由な発想や高い行動力を十分に持つことができることなどに由来するのでしょうか。しかし、時間に対する余裕の故に、それが永遠に続くかのような錯覚に陥る落とし穴も有ります。

今の諸君は、柔軟な時間を十分に持っています。それが大変貴重であると特に意識し、輝かしい未来を得るために、ぜひ有効に使い、幸多い人生を送られることを祈っています。

卒業・修了にあたって

将来のビジョン

岡田 毅
(鈴鹿高専出身)
材料開発工学課程 4年



私は将来のビジョンを持っていなかったもので、大学生活の中で掴んでいこうと考えていました。入学後は高専時代よりプラスされた内容を学ぶことになりましたが、見たことがある内容だからと甘く見ていたので苦勞しました。この時点ではまだ学ぶことが受け身になりがちでしたが、頭ではより多くの知識を習得することが社会に出てから自分の為になるだろうと考えていました。

さて卒業が近づき、自分の知識を増やすために修士を目指しました。しかし、頭では自分の為だと思っけていても、実際の気持ちは勉強が嫌いだったので、なかなか手がかず試験に落ち、結局就職活動もしてなかったので自分の進路が無く留年を取ることにしました。しかし、修士を落ちたことで私は就職をして社会に出る踏ん切りが付き、留年後、始めるのは遅れましたが4月から就職活動を行い、7月に就職先が決まりました。就職活動の中で自分を見つめ直す機会が増え、少しずつ自分自身が見えてくる中で就職するのがベストだったと感じました。また、卒業研究の



研究室のOBとパーティー

中で、研究内容について学んでいくうちに自分の中で楽しくなり、勉学のイメージが少しずつ変化していきました。大学は社会に出る一歩手前の段階なので将来のことをダイレクトに考えさせられましたが、私は人より少しゆっくり考えることで将来のビジョンを持つことができました。

最後に大学生活の中で出会った先生方や先輩方、友人達そして何より親に感謝します。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

和を以って尊しとなす

溝口 隼
(都城高専出身)
材料開発工学専攻2年



私が、本学に入学したのは4年前でした。月日がたつのは早いものでもう修了を迎えます。私は九州出身なので、新潟に来て1年目は、何をすることも何を見るにも初めてで毎日が楽しかったのを今でも思い出します。平日でも講義を終えてよく遊びに行ったものです。

そんな楽しい1年を過ごした後、待っていたのは自分自身の改革でした。研究室に配属され、これまでとは全く違う生活になり、最初は戸惑いました。今思えば、研究室配属は私の人生にとっての転機であったと思います。これまでの自分の子供染み甘い考え方や生活態度、さらには根性まで叩き直されました。題名となっている言葉は、私の研究室のモットーの一つです。私の研究室ではこの言葉が基盤としてあるので、私達学生一人一人の個性が活かされていることに気付かされました。協調性と個性。一見、相反しているようなこれらの言葉ですが、どちらが



研究室旅行にて

欠けても社会では通用しないということを大学で学びました。

私にとっての技大への進学は学問の習得だけでなく、人間関係も養われた、一生忘れることのできない貴重な体験であったと思います。

最後に、熱心にご指導いただいた先生方、友人、研究室での先輩や後輩に心から感謝の意を表します。これからは、一社会人としてがんばっていきます。

卒業・修了にあたって

大学院博士後期課程

“時”と“出会い”

佐藤 裕子
(山形県立鶴岡工業高校出身)
材料工学専攻5年



寒く長い冬を何度も乗り越えてようやく迎っていた修了。九年前の四月と比べるとすっかり消滅してしまった初々しさを懐かしいと思うほど、月日が経っていることを実感しています。特に研究室に入室してからの生活は時間が駆け抜けるように過ぎたと言っても過言ではないでしょう。

長岡で過ごした九年間は、素晴らしい先生方に教鞭を執って頂いたことを始めとし、研究室での過酷かつ笑いと涙に溢れる生活、バレーボール部の仲間達と過ごした日々、そして友人たちと共有した貴重な時間など、私にかけがえのない“時”を与えてくれました。

また、地震、大雨や大雪など自然が牙を剥く瞬間に遭遇し、整えられた生活が崩れることの悲惨さを肌にも感じることがありました。その中で感じた人間の強さは今でも忘れることができません。研究だけではなく日々の生活から得られる多くの経験がVOSの精神を培う大きな要因となったと改めて感じています。

修了を目前とした今、私は出会った多くの



中国で行われた研究会を終えて(筆者:一番右)

方々に感謝しています。全ては意味のある出会いであり出来事だったと。何かに行き詰まった時に突破口を開くのは、先生方や先輩そして友人たちから過去に頂いた助言や叱咤激励でした。頂いた数々の言葉は今でもしっかりと私の中に根付いています。これからも人との出会いを大切に、歩んでいきたいと思っています。

最後に、齋藤秀俊教授を始め齋藤研究室の方々、そして陰から支えてくれた家族に深く感謝致します。

贈る言葉

変化の時代を乗り切るために

ご卒業、修了、おめでとうございます。

中越地震から1年余りがすぎ、まだ8,000の方が仮設住宅に住んでいるとき、2回目の冬は12月から豪雪に見舞われました。震災復興では、復旧ではなく、創造的復興、再生が強く提唱されています。震災前もとの状態に戻したのでは、戻った時には社会は大きく変化しているから、復旧だけでは役に立たず無駄をしたことになってしまいます。

地震、豪雪など自然現象だけではなく、君たちがこれから働く会社、職場とその環境は、変化し続けています。嘗て経験したこと、学習したことに似ているようでも、同じことの繰り返しはなく、常に変化しています。このような「変化」に順応し対応する、自分で「変化」を創造していくには、しなやかな柔

軟性、フレキシブルな頭脳が要求されます。

そのためには専門分野はより深めて、しかも一般教養を広げる、人によって呼び方は様々ですが、T字型人間、V字型人間になることです。単細胞的な人間ではなく、多面的で流動的な思考ができる人間です。専門分野の工学は極めます、でもそれだけではなく、政治、経済、歴史、文化など幅広い分野の読書や、他分野の人との交流が必要です。今のような「変化の時代」を乗り切るために、日頃から心がけるポイントと思います。もちろん簡単になれるものではありません。そういう目標を持って、邁進して下さい。

健康で、大いに活躍されることを期待します。

環境・建設系長

松本昌二



卒業・修了にあたって

出会い

高校を卒業してから4年が経とうとしています。4年前の春、初めて一人暮らしをする不安と新しい出会いへの期待が入り混じる中、本学に入学することになりました。

大学生活を振り返ってみると、たくさんの出会いがあって、そのどれもが私を成長させてくれたように思います。入学してすぐ感じたのは、大学というところは友達がいないとやっていけないなということでした。工学部ということもあって女友達は人数に限界がありました。課程に分かれてからはクラス8人のうち女の子は2人で、学校にいるときもいないときもほとんど一緒にいた気がします。テスト前にどれだけお世話になったか…そしてどれだけグチをこぼさせてくれたか…いつも本当にありがとう。みんなと出会えた私はラッキーでした。

出会いといえば、学外でもバイト先の仲間や語学留学先のオーストラリアで出会った友達、ホストファミリーなど、この4

(新潟県立高田北城高校出身)
樋山沙央里
建設工学課程4年



建設女子での旅行にて

年間で私を知る人が一気に広がったような気がします。春からは初めて新潟を離れ社会人として生活していくわけですが、新しい出会いがあると思うと今はすごく楽しみです。

最後に、一年生の頃からいろいろと目を掛けていただいた先生方、両研究室のみなさん、私と出会ってくれた友人たち、そして陰ながら支えてくれた家族には本当に感謝しています。ありがとうございました。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

チームワーク！

松

（和歌山高専出身）
本 章 裕
建設工学専攻2年



学生生活で得られたものの中で最も嬉しかったことは、かけがえのない友人ができたことです。困った時、苦しい時、頼ることができる友人がいる。これほど心強いものはないです。

私の研究テーマは、一人で作業を行うにはとても困難で規模の大きいものでした。また、どこか肝心な部分が抜けている私はよく失敗があり、そのため遠回りや時間と労力を浪費することが多かったです。

困っているときに助けてくれる友人がいる。作業を進めていく上で私自身、気がつかなかったことにアドバイスをしてくれる友人がいる。失敗したとき、その失敗を何とか取り戻そうとアイデアを出してくれる友人がいる。落ち込んでいるとき励ましてくれる友人がいる…。

実験する時、論文をまとめる時、発表する時、振り返ると、多くの友人達によって支えられ、支えがあったからこそ、困難を乗り越えられたと思います。

私自身も友人が困っているとき、助けが必



コンクリートカーナー大会にて 研究室の同期と…
(筆者は左から2番目です)

要なとき、できるだけ協力するように心がけました。友人の協力が嬉しかったので、少しでも恩返しをしたいという気持ちと困っている友人を放っておけないという性格からだと思えます。

こうして考えると、チームワークの重要性を実感しました。社会人になってからは、より一層求められることです。学生生活の経験をもとに4月からがんばっていきたいと思います。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

学生生活を振り返って

繁

（東京都立高専出身）
田 慶 一
環境システム工学専攻2年



月日が経つのは早いもので、私が東京都立工業高等専門学校を卒業し、本学へと進学してからもう4年が経ちました。高専時代は機械工学を学んでいたのですが、以前から環境問題に対して興味を持っていたことと、未知の分野に挑戦してみたいという思いから本学では環境システム工学科へ編入してきました。

大学での勉強は習うことすべてが新鮮で面白かったですが、分からないことも多く、テスト前には同じ学生宿舎に住む友人達と一緒に勉強することで、順調に単位を修得することができました。

私はバドミントン部に所属していましたが、社会人リーグで優秀賞をいただくことができ、他の大会でも優勝するなど良い結果を残すことができました。また、研究の合間に運動をすることでストレスを発散することができ、研究に打ち込めたと思います。部活のおかげで私の学生生活はとても充実しました。

学生生活を振り返ると私は実に多くの人々



他大学との合同ゼミにて

に助けられてきたと思います。研究でうまくいかず悩んでいるときも松本昌二先生と佐野可寸志先生からは多大な御指導を賜りました。研究室・部活の皆様、そして多くのご支援いただいた皆様、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、今まで温かく見守ってくれた両親、家族に心より感謝いたします。

贈る言葉

来る門出に長期的な目標を

新しく卒業・修了される方々にお慶び申し上げます。希望を抱いて社会に飛び出す時が来ました。人生には大きな節目があります。入学は本当の意味の旅立ちではなく、この卒業（Commencement）が本当の始まりです。この本当の出発にあたって、これからの計画を立てて下さい。在学中から常々、事を行う時には、計画を立てて十分検討して実行に移すように指導してきたつもりです。

社会に出るにあたって、短期的な目標と長期的な目標を作ることをお勧めします。目標は人によって色々あるでしょう。短期的には会社になれ、自分の力を少しでも発揮すること、また、語学力を高めることなど——。長期的な目標となると、実

際には、考えにくいと思います。しかし、この目標を立てることによって、自分の進路がはっきりしてきます。

就職した会社を無事に務めあげることも立派な目標です。そのような目標が決まれば、ゆっくりとスタートをきることも、大切かもしれません。また、些細なことも気にならないかもしれません。また、中期的な目標も自ずと、見えて来るように思われます。このようにして、一步一步進んでいく中で、計画が実行され、将来満足出来る人生になるはずです。20年、30年先などわからないと思わないで、長期的目標を是非、門出に立てて下さい。

生物系長

宮内 信之助



卒業・修了にあたって

学部

「遂に卒業」と「もう卒業」

永井 秀明
(仙台電波高専出身)
生物機能工学課程 4年



私は卒業するにあたって「遂に卒業」と「もう卒業」と2つの感じ方をしています。

私は仙台電波高専からこの長岡技大に編入したのですが、高専を卒業すると同時に就職し、間もなく社会人として3年目を迎える友人が多くいます。彼らと会うと「自分も遂に卒業するんだ」と感じます。

しかし、技大の同級生はほとんどが大学院に進学し、卒業して就職するのは折り数える程の人数しかいません。彼らを見ていると、「自分はもう卒業してしまふんだ」とも感じます。このように感じるということは、長岡で過ごした2年間は「遂に」と感じるほど濃密で、「もう」と感じるほど早い、自分にとってかなり有意義な2年間だったのだと思っています。

高専から技大に進学したことは、自分にとって良い結果だったと言い切れます。



忘年会にて

就職するに当たって研究室の先生方にはご迷惑とご心配をおかけしましたが、これからは、このタイミングでの卒業が良かったと言えるように、社会に出てからも頑張りたいと思います。

最後になりますがお世話になった先生方、先輩や友人達、そして大学進学を許してくれた両親に感謝しています。本当にありがとうございました。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

長岡とよせし...

菅野 さくら
(神奈川県立小田原高校)
生物機能工学専攻2年



18歳の冬、バスに揺られて技大へ向かう途中、窓越しに私は生まれて初めて一面の銀世界を見ました。言葉にできないほどの感動があることを知りました。

この6年間で長岡の町は随分変わったと思います。技デイリーがなくなったときは少し悲しい思いをしました。でも、ローンできたし、原信は24時間営業になるし、つくづく便利になったなあと感じます。私は自分で実験レポートやテストに四苦八苦したり、自転車で柏崎まで行ったり、大好きなバレエしたり、憧れだった研究をしたり…数え上げればきりが無い程多くのことを経験してきました。また、偶然長岡に集まった、様々な生き方や価値観を持つステキな人達に出会いました。これらの全てが私を刺激し、これまでの自分にはなかった新しい考え方を根付かせてくれました。

そんな私も24歳になり、長岡で、技大生として、ひいては学生として過ごせる日々が残り少なくなったと実感する今日この頃、



研究室のきのご狩り。これから食べます!

学校の帰りに見た、真っ白な長岡の景色はあの時と同じような感動を私に与えてくれました。長岡の町にも私の中にもある変わらないものと変わっていくもの。お互いの本質を見失わないで、これからもいい方向に成長していきたいと心から願います。

最後になりましたが、これまで未熟な私を助け、励まし、ときに叱ってくれた多くの友人、研究室の仲間、諸先生方、そして両親に心から感謝します。本当にありがとうございました。

卒業・修了にあたって

大学院博士後期課程

卒業・修了にあたって

根本 淳史
(小山高専出身)
情報・制御工学専攻5年



生物機能工学課程3年生に編入学をして早7年が過ぎようとしています。その7年は、知らない土地での初めての一人暮らしから始まり、右も左も分からない大学生活、企業での実務訓練など様々なことがありました。新天地での生活ということで胸を膨らませて長岡へ引越しをしてきましたが、正直不安もたくさんありました。しかしたくさんの友人達に出会い支えられ、充実した学生生活を送ることができました。

大学院修士課程に進学してからは、学生実験のティーチングアシスタントの仕事に携わり多くの後輩と知り合うことができました。ティーチングアシスタントでは物事を教える大変さを知ると同時に、研究の合間の休息を得ることができました。それは私だけかもしれませんが…。さらに大学院博士後期課程に進学してからは発表の機会も増え、海外にも行くことができました。

一方、中越地震や19年ぶりの大雪といったような災害も経験しました。中越地震



松野・本多研究室の仲間達と

では電気もガスも水道もない生活の中でたくさんの友人の温かさを感じました。

私はこの長岡技術科学大学でたくさんの思い出を作ることができました。この7年間で経験した貴重な体験や思い出をエネルギー源として私は新しい生活へ旅立っていきます。

最後になりましたが、今までお世話になりました先生方、研究室の皆さん、友人そして両親に心より感謝致します。本当にありがとうございました。

贈る言葉

「運」「鈍」「根」

卒業・修了おめでとうございます。大学という最高学府で学び、それぞれの専門分野で深い研鑽を積み、晴れて学士、修士、博士の学位を取得して新しい次のステップに歩み出そうとしている皆さんに、「運」「鈍」「根」の言葉を贈ります。

運・鈍・根（うん・どん・こん）は、成功の秘訣を意味する人生訓のように巷間では言われています。しかし、これから世に出て人類の幸福や社会・産業の発展に貢献する新しい技術の開発に精励しようとする皆さんにとっては、むしろ、物事を成し遂げるのに必要な心構えとして機能するものと思います。「運」は幸運や悪運の「運」ですが「運動」の「運」でもあります。人生において「運」はつきものですが、「幸運」を座して待望するだけで

経営情報系長

大里有生



はなく、「運」を引き込むことが大切です。色々な可能性を追い求め、挑戦する心を豊かにして物事に活発にトライする事、これが「運」につながると思います。「鈍」は、物事をじっくりと愚直なまでに粘り強く進めるという意味です。「根」は文字通りの「あきらめず根気よく」の意味です。色々な可能性を求めて多様なアプローチを試みる事、そして、直面する困難に簡単には屈服しないでチャレンジすること、これが「根」の精神です。

この「運」「鈍」「根」の精神を忘れず、長岡技術科学大学を卒業・修了する皆さんが、必ずや最高学府の諸先生方を凌駕する「技の高さ」「智の深さ」をもつことができることを願って止みません。

卒業・修了にあたって

2年間を振り返って

経営情報システム工学課程4年
高羽 絵美
(福島高専出身)



学部

3年次編入した私は本学には2年間しか在籍していませんが、この間に体験し、学んだことは多くあります。

2年前、山に残る雪に驚いて始まった長岡での生活は、たくさんの人に支えられながら過ぎてきました。授業においては、特に今までほとんどやっていなかったプログラミングに悪戦苦闘し、友人が放課後など授業時間外にも付き合って助けてくれたお陰で、仕上げることができました。

4年になってからは、めっきり研究室にいる時間も増え、研究室の先輩方にもかなり面倒をみてもらい、お世話になりました。所属していた研究室は、人数が割と多いこともあってか、自分にはないものを持った個性ある方も多く、人間として学ぶ部分も多くありました。そんな先輩方とは、一緒に昼食・夕飯を食べたり、飲み会や温泉旅行などしたりして、楽しく過ごすことができました。



研究室の先輩と

今年の4月からはいよいよ社会人となり、新しい環境で0からのスタートとなりますが、人間関係を大切にし、いろんな意見・考え方を聞きながら、多くのことを吸収し、充実した生活を送れるよう努力していきたいと思います。

最後になりましたが、これまで私に関わり、支えて下さった全ての方に感謝いたします。ありがとうございました。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

大学生生活総合評価

経営情報システム工学専攻2年
丹野裕貴
(福島高専出身)



世の中って奴はいい感じにバランスが取れているもので、悪いことがあればその分いいこともついてくるものです。この大学生活においても例外にあらず。ぶっちゃけた話、人生屈指の大地震にあった事や、車が大学構内で壮絶に当て逃げされた事、ヤのつく自由業の方に絡まれて電車で乗り遅れた挙句、就職試験に落ちたなんてのは私の人生屈指の悪い思い出です。出来ることなら無かった事にしたいです。このままだと走馬灯に走りますもの。この思い出。

で、何が悲しくてこんなネガティブな出だしかと言うと、最初にも書いた通り、そんなのを吹き飛ばす位にいいことがありましたよって事を伝えたかったんです。例えば、確かに、地震のときは大変でした。しかし、不謹慎な言い方なのを承知で言えば、あの時ほど友人達の存在を感謝したときはなかったのです。あらゆる意味で、貴重な経験です。

まれに、友人と「～年前に戻れたら私はこうする」なんてことを話したりします。



花火大会集合写真

もし私が4年前に、高専卒業時に進路で迷っていたときに戻れたなら、私はやはりこの大学に編入するでしょう。嫌なことがありました。嬉しいことがありました。それら全てを総合して考えて、もう一度ここに来たいと思えるくらいに楽しかったのです。その程度には面白かったのです。私のこの4年間は。そう思えた事と、そう思わせてくれた知人・恩師に感謝しつつ、締めとします。本当にありがとうございました。

卒業・修了にあたって

大学院修士課程

渡り鳥のよう

経営情報システム工学専攻2年
権ヨルム
(韓国出身)



私は2003年4月2日、新潟空港に到着しました。その思い出はまだはっきりと残っています。飛行機から信濃川と新潟港を挟んで広がっている平野、水田が見え、近付くとランドクラブの黄色い看板が見えました。度々韓国に戻る機会が多くなり、初めて見た新潟の風景はそのうち私を帰って来た渡り鳥のように感じさせてくれました。1年前からの韓流ブームで新潟空港から韓国に行く飛行機便が週5日から毎日運航になってしまい、観光客が急増して自分のスケジュールも1日延期された事もありました。

本大学院で勉強した期間は2年間と短かったです。修了に向かい誰より豊かな経験をしたと確信しています。その機会を与えてくれたのが長岡技術科学大学であり、私にとっては日々精進しうる環境でした。入学する前には悩みましたが、この学校でよかったと感じます。特に教育環境が充実しているし、留学生についての配慮も他の学校より非常に優れていると感じました。

今後の抱負としてはグローバルな意識を持



佐渡ヶ島にて、研究室旅行

つ人になる事です。そのためには単純な考え方ですが、思うより簡単な事から始められます。まず、右、左ハンドルでも運転できる事、どこの国の人でも話しかける力を身につける事、国々の料理を違和感なく食べられる事です。ただ、言語の能力や技術的な事ではなく、世界に向いての心構えと言えますね。

最後に、長岡技術科学大学と巡り合い、新潟県を知ったことは自分の将来の軸となると思います。

贈る言葉

初心を忘れずに

卒業生、修了生の皆様、ご卒業おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます。

卒業される留学生の皆さんは、言葉や生活習慣の違う日本に来て、いろいろと大変な苦労があったと思います。一昨年の「新潟中越大地震」や今冬の豪雪等の自然災害を乗り越えてきました。何事にも負けない力も付いた事でしょう。

これから日本の各地、また自分の故国、世界各地に旅立つ訳ですが、長岡で学んだ事や生活してきた事が役立つと思います。三段跳びの時に、ホップ、ステップ、ジャンプと距離を伸ばしていきますが、最後のジャンプを乗り越えて社会へ出てい



むつみ会会長

中川 睦子

きます。その時の気持ちはどんなですか？

「初心忘るべからず」という格言があります。何事においても最初の気持ち、真剣な気持ちを忘れないで下さい。大学へ入学した時、就職が決まった時、自分の目標が見つかり、よし、がんばろう、という気持ちになったと思います。その時の気持ちを忘れず、時々思い出して下さい。有意義な人生を歩んでほしいと願います。

むつみ会を代表しまして、皆様方の今後の活躍を期待し、健康を第一に過ごされますように。いつか又お会い出来る日が来る事を楽しみにしています。

贈る言葉

新しい門出を祝して

卒業・修了される皆さん、おめでとうございます。同窓会を代表して心からお祝いを申し上げます。そして同時に、長岡技術科学大学同窓会の正会員になられたことにも心からお喜び申し上げます。

本学は、来年度、めでたく開学30周年を迎えます。同窓会会員数は九千人を超え、日本国内にとどまらず、世界の第一線で活躍しています。皆さんも、歴史ある本学の同窓生として、各界でご活躍されますよう期待しております。

近年、個人情報保護が叫ばれています。同窓会でも個人情報保護に関する基本方針を制定しました。そして、同窓会の事業の大きな柱のひとつであった、同窓会名簿の発行を今年度から中止しました。名簿が流出し、同窓生の名を騙ったセールス等が行われており、疑問に思った方からの大学への問い合わせもあるようです。名簿は、同窓生同志の貴重な情報源でありました。それが一部で悪用されるために、



同窓会会長
(燕工業高等学校教諭)

磯部 広信

会員に届けることができないのは非常に残念でなりません。

今後も名簿の管理は継続して行い、大学や同窓会の情報は別の形で届ける予定でいますので、連絡先の変更がありましたらご一報をお願い致します。

さて、この冬は、12月から記録的な降雪がありました。新潟県内だけでなく、他県でも深刻な被害を受けた地方があります。皆さんの地元や就職先はいかがでしょうか。雪下ろしのために帰省した方もいたと思います。近所の雪掘りを手伝った方もいたでしょう。こんな時こそ、地域の気遣い・信頼関係の大切さや有難さを感じられたのではないのでしょうか。

この数ヶ月、信じていたものが失われるような事件が数多く報道されました。皆さんは、そんな世の中に流されず、ここ長岡の地で培った暖かい心遣いを忘れず、本学同窓生の名にふさわしく、正々堂々と、充実した人生を送られますよう心よりお祈り申し上げます。

「安全工学」の開発

機械系
教授
蓬原弘一

一昨年退職された田中絃一教授の招へいを受けて長岡技術科学大学に客員教授として就任し、さらに教授として奉職してすでに5年が過ぎてしまいました。

それまで、私は企業におり、多くの安全関連設備の開発と研究に30年余り従事してまいりました。例えば、鉄道では100万個を超えるポイント（線路の切替部分）での安全確保や列車検出装置の電子化に関する機械的構造の研究および踏切や駅構内における列車制御に関する研究を、さらに、航空機の地上誘導に関する研究、道路交通制御に関する研究、プレス機械や産業用ロボットの制御などの一般産業用設備に関する研究を行い、これらに関連して製品開発および論文の発表を行ってきました。このような成果で長岡技術科学大学とのご縁ができたものと考えております。

上述の研究および製品開発を進める過程で、私は“安全とはなにか”という疑問と、広範な安全問題に対して“安全確保方法の共通原理はなにか”という疑問について一貫して追求してまいりました。その結果一部を解説できるようになりました。まず、長い間このような研究の機会を与えてご教授いただきました企業内先輩方、関係する大学の先生方、ならびに広範な研究の機会を与えていただきました公的調査研究機関の方々に深謝する次第です。

安全工学の適用範囲は広く、しかも、大学で安全工学を講義するにも、参考にする資料は4、5年前の当時世間には皆無でした。このため、大学に参りましてから、それまでまとめていた制御に関する安全工学を、大学院での機械安全工学の講義資料（ノート）として拡張してまとめる作業からはじめま

した。まとめたと言っても、少し難しい表現のところの修正や、ノートの構成などを含めて現在も改定中です。この講義資料の作成では、安全に関する国際規格ISO12100およびISO13849-1の参照と、この規格作成にあたっての欧米との国際的議論が大変参考になりました。1999年国際電気標準会議（IEC）が京都で開催されました。その折、経済産業省傘下の日本機械工業連合会から、適用の製品開発例と一緒に講義資料の基本的考え方の一部が世界に紹介されました。その後いずれの国からもその論理的展開に対するコメントはきていません。また、適用の開発製品は一部すでに数か国で実用されています。このような国際貢献の評価を受けたことによると思われませんが、平成15年10月経済産業省より大臣表彰を受けました。

大学生活に不慣れな私にもかかわらず、客員教授時代を含めて、色々面倒を見ていただき、また上述の仕事をさらに推進させて戴きましたことを私は幸せに思っております。長岡技術科学大学学長をはじめ大学経営に当たられる諸先生方、ならびに武藤陸治教授外諸先生方、事務局の方々に深謝申し上げます。また、専門職大学院の開設を心よりお喜び申し上げますとともに、今後の発展をご祈念申し上げます。



筆者近影

長岡技術科学大学にお世話になってから13年が経ちました。赴任は1993年1月4日、雪の降る中での引っ越しで少々驚きましたが、その時には上越新幹線も関越自動車道も開通しており、長岡での生活は快適になっておりました。大学に着任後、大学開学当時の交通の便や、建物の様子を伺う機会が多々ありましたが、その当時に比べて建物が充実し、交通の便も格段に良くなっており、先輩の先生方が苦勞して築き上げた環境の上にそのまま居座ることになり、本当に申し訳なく思っております。

当大学に赴任する前は、横浜にある民間企業で応用光学、画像処理の研究を行っておりましたが、赴任後も全く同じ研究を続けることができ、本当に幸せでした。研究室立上げ当時から現在に至るまで、吉田技術職員に全面的に協力して頂くとともに、多数の教員の方々にお世話になりながら、実験環境を充実し、順調に成果を出すことができました。お世話になった先生方にこの紙面をお借りして心からお礼申し上げます。

当地では研究・教育もさることながら、体育会系クラブに参加させて頂き、何一つ「もの」にはなりませんでしたが、楽しい日々を過ごさせて頂きました。ゴルフでは「悠球会」に入れて頂き、妙高カントリー倶楽部でホールインワン（日本語では「まぐれ」と訳すそうです）を出しました。

登山では「てくのろ山岳会」に入れて頂き、新潟県内にある日本百名山11座の内、9座を登破しました。残りは朝日連峰と飯豊（いいで）連峰ですが、両方とも自炊の山小屋しかない上に、登山に4日以上かかりますので、定年後ゆっくりと登破したいと思っております。最近若くは若い人の登山離れが激しく、「てくのろ山岳会」も高齢化の一途をたどっております。そのため本年をもってこの会が解散されることになり、昨年10月に加賀白山へ解散記念登山を行いました。その時白山奥宮で撮影した写真を添付します。私の生きがいがだった「てくのろ山岳会」が解散されることになり、残念でなりません。

きのこ・山野草の会では「野趣会」に入

楽しい13年間でした

機械系
教授
秋山伸幸

退職にあたって

れて頂き、少しはきのこの知識も増えました。この会では秋にタケノコ採りも行います。初めは、なぜ秋にタケノコ採りなのかと不思議に思いましたが、これは「もうそう竹」ではなく、「ねまがり竹」のタケノコ採りです。ものすごい竹藪の中に分け入って、泥だらけになりながら、「ねまがり竹」をとる作業にびっくりしました。

ゲレンゲスキーは当地に来てから始めましたが、毎年15回以上行っていますので、通算すると150回以上行ったこととなります。最近では越後丘陵公園でのクロスカントリースキーにはまっており、この冬も何回か出かけております。スキーは、本当は高齢者向けのスポーツではないかと思っておりますので、生涯続けたいと思っております。

何と言っても当地に来てからの最大の収穫は、市民体育館のメンバーになってからのトレーニングルーム通いです。1週間に4～5回は筋力トレーニングに通っておりますので、体力には多少自信ができました。このトレーニングルームでは地元の方々との交流も増えまして、貴重な経験になりました。

本当に楽しい13年間でした。遊んでばかりいましたが、これからは当地で培った体力（智力はありませんが）を元手にして、スキー、登山、ゴルフそして筋力トレーニングを続けたいと思っております。

本当にありがとうございました。



昨年10月に加賀白山へ「てくのろ山岳会」の解散記念登山を行ったときの1コマです。

退職にあたって

”3デシベルの人生”

昭和53年（1978年）の本学開学と同時に東京から長岡に移り、あっという間に28年が過ぎました。それまで「長岡」という地名を知ってはいましたが、どんなところかまったく想像もできませんでした。小学校か中学校の教科書に新潟県高田は雪が多く通りには雁木という雪の季節の通路があることは知っていました。しかし、「長岡の雪」ということはまったく想定外であったので、雪の多さ（特に開学からの6,7年間）に愕然としました。しかし、28年間という長い間、この地にとどまれたのは学生と教職員をはじめとする周囲の人々のおかげだと感謝しています。また、私自身非常に楽天的であったこと、すなわち「3デシベル（dB）の心」を持ち続けたからかもしれません。電気（電子）工学の分野ではよく3dBという言葉を使います。デシベルは電圧（電流）の比の常用対数に20を乗じたもので増幅器の周波数帯域幅やフィルタの通過帯域幅を表すのにしばしば使われます。ここで私が「VOS」の原稿を書くにあたりよく考えてみますと、私自身の考え方そのものが「3dB」であったことに気づいたのです。一見次元の異なるものを等号で結ぶという工学者らしからぬものですが、これが人生を楽しませてくれる数値でもあるのです。というわけでタイトルを「3デシベルの人生」としました。これから述べることはあくまでも独断と偏見に満ちたもので、これが私の人生哲学とまではいきませんが、楽しく生きるコツとなっています。

私は昭和38年（1963年）の大学卒業以来約40年間フィルタ一筋に生きてきました。フィルタでは信号電圧（電流）の最大値から3dB減衰した周波数まで

を一般に通過域として用いますが、3dBという数値は最大値を1とすると、その0.7の点に相当します。試験成績で考えますと、そこまでが合格点ということになります。大学では60点まで合格としていますので、デシベルで表すと4.4dBということになり、一見甘いように見えますがそうではありません。フィルタでは0.7の点までは「優」または「A」という評価になります。大学では試験点数だけで「A」、「B」、「C」、「D」と評価していますが、これに「将来性」を加味して70点以上を「A」としてもいいのではないのでしょうか。このように私は「3dBの心」、すなわち何事も最終目標の70%以上であれば「優」と考えています。この数値は65年間生きてきて世の中を楽しく生きていくための値として適当ではないかと思っています。

写真は大学院での最終講義の後に学生から花束をもらったときのものです。今までで一番うれしかったことのひとつです。学生及び教職員の皆さんに改めて感謝します。ありがとうございました。

電気系
神林紀嘉 教授

大学院最終講義（2005.12）で花束をもらい感激

昭和53年4月3日、雪の三国峠をチェーンを巻いて越え本学に赴任して来ましたが、いよいよ定年を迎えることとなりました。28年間の永きに亘り無事過ごすことができましたのは、多くの教職員の皆様および研究室の学生諸君のおかげと深く感謝しております。

開学当初の電気系は教授5名、助教授7名の少人数でしたが、夕方になるとサービスルームに三々五々と人が集まり、お酒を飲みながら和気あいあいと技大の将来を語りながらそのまま殿町方面へ流れて行ったことが懐かしく思い出されます。

長岡での生活では、なんと言ってもメリハリのある四季、春夏秋冬の移ろいが素敵でした。4人の子供たちは皆幼稚園から高校卒業まで長岡で過ごすことができ、テニス、スキーともかなり上達し一生の趣味として行けるでしょう。もっとも、これらは全て家内のお陰であり、私はただ端から見ていただけですが。

冬と言えば何と言っても雪にまつわる事柄が思い出されます。赴任当初は後輪駆動の車に乗っていましたが、特に寒い日には技大に上ってくる途中で一旦止まってしまうと発進できなくなり、ワンタッチチェーンのお世話によくなくなりました。その後、4輪駆動の車に買い替えたとたん大雪が降らなくなり、何のための4輪駆動だったのかと嘆いたものです。雪庇の怖さを体験したのは、赴任2年目のことでした。当時、2階建ての借家に住んでいましたが、ある時気が付くと屋根からかなり大きな雪庇がせり出ていました。下

退職にあたって

「長岡での思い出」

電気系
入澤 教授
壽逸

から上手く突付くと、すつんと下に落ちると思い2階の窓から身を乗り出して屋根との境目に割れ目を入れたとたん、軒先を支点として大きな雪の塊が回転しドカンと窓に当たり窓ガラスを割ってしまいました。雪国ならではの経験でした。

春から夏にかけての新緑の頃の長岡はなかなかのものですが、毎年この頃になると感慨深いのは「たち葵」です。壮年（45歳）になってから、春になると毎年テニスの国体出場を目指して早朝にトレーニングの積りでせいぜい5キロ程度ですが走っていました。走り初めの頃は、道端に少し顔を出している程度ですが、見る見るうちに背丈が伸び、国体予選の始まる6月末には美しいピンクの花が咲きほこります。今はもう10年以上前から試合には出ていませんが、毎年この花を見ると苦しく厳しかった試合のことが蘇ってきます。

早いもので、今年は開学30周年の年です。これからもユニークな大学でありつづけますよう、祈っております。



研究室にて

退職にあたって

雪国の春雑感

化学系
教授

山田明文

中学の国語で、先生が語ってくれたのを今でも思い出します。「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらわす。おごれる人も久しからず、唯春の夜の夢のごとし。たけき者も遂にはほろびぬ、偏に風の前の塵に同じ。」人生60年といわれて久しく、いつのまにか馬齢を重ね小生も退職を迎えることとなりました。

大学で教員をしていた父は30歳で亡くなりました。以来母は、おまえは一生懸命勉強してお父さんの2倍も、3倍も生きて親孝行しなさいといわれたのを子供心に覚えています。そんな母も施設に入っていますが、お蔭様で92歳を迎えました。ちょうど父と私の歳を足した分くらい生きてくれたこととなります。施設は完全介護ですが、夕食のときくらい食事介助をしたいと思い、ここ10年余りできる限り続けてきました。母は言葉数も少なくなってきましたが、昔のことは良く覚えており、音楽を介して会話が続いています。

故郷は長野県の松本で、高校までを松本で過ごし、仙台で大学時代を過ごしました。大学院修了後はそのまま母校に奉職することになりました。本学への赴任は今年と同じように雪の多い56豪雪の年でした。当時は仙台、新潟間に飛行機が運航されており、新潟空港も薄い芝生の緑が目に入る状態でした。長岡への高速バスの車中から眺める景色はだんだんと白くなり、長岡に着く頃には道路には背丈以上の雪があり想像を絶するものでした。思えば松本も仙台も寒いですが、冬の晴天日数は頭5番以内に入っており、当地が雪が多いということを知らずに来ましたから、祇園精舎の鐘の音どころではない驚き

でした。その後59豪雪にも遭遇し、定年の年をまた大雪で迎えた次第です。仙台時代には38豪雪を経験しましたから、雪とは避けられない縁なのかもしれません。

雪の季節が終わると越後にも春が巡ってきます。草木がいつせいに芽吹き、新緑が目にしみる日々を迎えます。仙台では年に2、3本ヤマウドを見かければ上々でしたが、こちらへ来てからはいたるところにヤマウドがあり、その料理法も豊富なことに驚きました。他にも、コシアブラ、タラノメ、トトキ、シドケ、キノメ、トリアシショウマ、ゼンマイ、ワラビ、ミズナ・・・と一気に多くの山菜料理を食べさせていただきました。今では冬にたくさんの雪があるから、おいしい山菜が食べられる、雪国の春に感謝しなくては、と思っています。雪国の春は小生の第二の故郷になりつつあります。

最後に、これまでつつがなく教職を務めることができましたのもひとえに皆様のお陰と感謝申し上げ筆を置かせていただきます。ありがとうございました。



野山にて

耐震設計への想い

環境・建設系
海野隆哉 教授

私は、国鉄、JR東日本に長く勤めていたのですが、1995年「兵庫県南部地震」が発生し、整備された耐震設計基準に則って設計されたはずの近代的橋梁等が大被害を被り、大変なショックを受けました。アメリカのカリフォルニア州などでしばしば地震により橋梁などが倒壊しても、日本ではそのようなことが起きるはずがないと信じ込んでいたのです。しかし、良く考えてみると、当時の耐震基準は関東地震による東京近辺にある構造物の被害が基本にあって、それに耐えられるように基準が作られていました。ところが、構造物はその後巨大化の道と部材のスレンダー化の道をたどり、構造物の地震応答も関東地震の頃とは異なってきたにもかかわらず、大多数の構造関係の学者・設計者は耐震基準が絶対的なものと思いこんで、経済合理性の原則に従い基準に合致すれば安全性は確保されると妄信して来ました。これらは、耐震工学者と構造工学者が自己の専門分野のみに特化して他の分野に関心を持っていなかったことが原因と思われました。この点、私がいた職場では両方の専門分野を理解する必要がありました。それで、遅ればせながら大学に職を得て、両者の融合を促すことができればよいと考え、本学にやってきました。

本学に採用されてみると、耐震工学で研究成果を挙げるのは諸条件から難しいと感じました。それより、工学的に不明な点が多くても実際には利用されている事柄を研究対象にして企業から資金援助をして貰うのがよいと考えました。

その結果、思いついたのが「気泡混合軽量盛土（気泡モルタル盛土）」の研究で、私が大学に来て9年間さんざん各種の実験を行ったあげく、湿潤状態下で繰返し载荷を行っても噴泥を発生させないという条件が最終的にもっとも大きな強度を必要とすることが分かりました。

また、土槽の中に大型模型を作って、グラウンドアンカーの引抜抵抗に関する実験も行いましたが、研究が未完で終わってしまい残念な想いです。

「耐震工学」に思いをはせながら、それらしいことが全くできずに終わるのではと思っていたところ、一昨年「中越地震」が勃発しました。被災された方には大変お気の毒でお悔やみの言葉もありますが、「耐震工学」に関係している者として、多くの知見を与えてくれるものでした。今回のような直下地震では、旧長岡市内といった狭い範囲でも東山丘陵西縁山麓部では地震動がきわめて強かったのに対して、数km離れた市の中心部ではそれ程までは強くなかったことです。K-net長岡支所と市の中心部とは震央距離はどちらも15km程度ですが、想定震源断層面からの距離が異なるなど他の要素が絡んでいるのでしょう。また、マスコミなどで喧伝されている「震源断層が地表に現れた付近の地震動は非常に大きい」というのは、真っ赤な嘘であることが今回もほぼ証明されました。地震断層面から少し離れている方が、地震波が増幅されて地震動が大きくなると解釈できます。

ともかく中越地震は、長岡技術科学大学での9年間の研究生生活の中で、生涯忘れ得ぬ強烈なインパクトを与えてくれたものと感じています。



筆者近影

退職にあたって

恵まれた年月

私が本学に赴任した1989年9月以来、16年半余りが過ぎました。当初は新設の生物系に所属し、1995年の環境システム工学課程新設に伴い、環境・建設系(当時の名称は建設系)に異動しました。それぞれの立ち上げ期には設備の面でもカリキュラムなどの面でも苦労がありました。その都度、最新の建物に入居して研究・教育するという幸運にも恵まれました。赴任直後は化学系の応接室に間借りさせてもらい、1991年度から生物棟(北半分完成)に移って最初の4年生を研究室に迎えました。諸事、不自由ではありましたが、教員も学生も清新の気に満ちており、6月頃には4年生が新3年生を歓迎する宴をパイ池の周辺で催したりもしました。彼らが大学院に進学したときには、毎日、英語の専門書を輪読することにしましたが、2ヶ月ほど実施してみると、予習に時間を取られて研究が進まなくなっていることが分かり、あえなく中止する羽目になりました。初期の試行錯誤の一端です。

環境・建設系に異動しますと、生物系とはかなり異なる伝統が根付いていました。修了式の後に欠かさず謝恩会が開かれるのはこの伝統によるのでしょうか。1995年度からは生物棟に間借りの形で居続け、環境棟に移ったのは2000年4月でしたが、この間にカリキュラムが改善され、私達の「環境生物化学研究室」への学生の理解も進みました。この年度には系長に選出され、系内事情に未精通なまま任務に専心せざるを得ませんでした。これも貴重な経験でした。

振り返ってみれば、本学における生活は全体としてかなり恵まれていました。本学赴任以前から細々と行っていた

D-アミノ酸関連の研究は、他の教員や学生の力を得て拡がり充実しました。酵母のD-アスパラギン酸酸化酵素、アカガイのアスパラギン酸ラセマーゼなどに関する成果は、実験に関った学生の忍耐力と集中力を随所に示していると思われます。

赴任当時の私はPC9800なるパソコンに5インチ、1MB程度のフロッピーディスクを使っており、ネットワークで巨大なファイルをやり取りする現状など、夢想もしませんでした。この面でも恵まれた環境にいることを、先日の中学校の同窓会で実感しました。私の年齢で画像ファイルを電子メールでやり取りできる状況にある者はほんの一部でした。それにしてもこの種の技術に弱い私は、本当にしばしば、若く有能な同僚のお世話になりました。この場を借りるのは不遜ですが、厚くお礼を申し上げます。

本学に来て初めて経験した合宿研修、実務訓練先や高専の訪問のお陰で、様々な地を歩き、見る機会を得ました。これも良い思い出を増しています。

特色ある本学が、法人化、少子化の波を見事に乗り切ることを切に願するものです。

山田良平
環境・建設系
教授



2005年度の研究室メンバー(2005年6月13日撮影)・筆者は前列中央

昨夏は戦後60年の節目、私の生れ年は終戦より4年前の昭和16年、太平洋戦争開戦の年でして、生まれた土地は三州（三河の国）豊川、越後とは遠く離れ縁の薄い土地の筈でした。

それが妙なことに縁あって本学に赴任したのは、平成2年の春のことでした。文部省の後押しの強い新構想大学で、発足してそれ程間もないのに実績をあげている本学の、新たな系の初代教授のひとりに加わることは、私にとって過分のことでした。新任スタッフ一同は、当時系としての建物をもたなかったため、あちこちに間借りしながらも張り切っていましたし、一期生諸君も元気でよく勉強してくれました。

そんな日々の中、ときに機械系4階会議室に立ち寄り、生物1号棟の基礎工事の進み具合を上からながめるのは、真に嬉しいときでした。そのときはまた、学部当時の先生を思い出すときでもありました。昭和16年、新教室建設の地鎮祭のおりの祝詞に、<この教室だけは、どんな大火事があっても焼けず、どんな大水がでて流されず、師弟あい和し、有能な人材がぞくぞく輩出するように>との言葉を盛り込んでもらった、といいます。先生のこの思いには、私もまったく同感でした。

あれから16年、あの時の思いをどれだけ達成できたでしょうか。卒業していった諸君から賀状が届くたびに、それが家族の写真入りであれば、幸せに暮らしていることがわかって、こちらでも幸せな気分になります。写真はなくても、一文添え書きがあると、近況がわかってこれまた安心です。彼ら・彼女らが激しく移り変わる世の中で、家族を守り社会の一員として逞しく生きていることを知るときほど、教師とし

退職にあたって

卒業生諸君を思いだしつつ

生物系
教授
鈴木秀松

ての責務の一端は達成できたのかなと感じ、安堵するときは他にありません。

ところで、人間はもともと<知の遺産>と呼ぶべき基本的能力を受け継いでいるといいます。それは、<世代を越えて知識を蓄積し、置かれた環境に応じてそれまでの文化を創造的に発展させていく能力>を意味します。現代の産業技術も経済システムも、<知の遺産>を継承して築かれたものだという訳です。変動の時代、改革の時代といっても、今あるものはその地において幾世代にもわたる経験に基づいていることを忘れてはならないと思います。

赴任してから知ったのですが、長岡と豊川は、実は牧野のお殿様を通じて縁の深い間柄でした。長岡には、三河にお墓がある方々がよく集まる居酒屋があると耳にした気がするのですが、どこにあるかわかりません。ご案内していただければ、<豊川から参りました>とでも挨拶して、末席で皆様のお話を聞いた筈、その願いが成就せず少々心残りです。

末筆ながら、今年は開学30周年、本学の益々のご発展を祈念しています。



長岡まつり・民踊流しへ出発前に

退職にあたって

これまでの時間・これからの時間

学務課・技術班技術長 片桐 一夫

42年間・15,341日であった労働の日々が終わることになりました。本学に赴任する前は、長岡にあった新潟大学工学部で15年間奉職し、昭和54年から本学で働かせていただきましたが、一貫して電気系真空装置を使い、電子材料の分野で過ごせたのは幸運なことだったと実感できます。人生最大の財産は人脈に恵まれることで、(カネもあったほうが良いが)人脈が増え続ける限り可能性も増え続けると確信しています。これが止まった日からその人の人生は結局に向かって右肩下がりになることでしょう。これまでの時間の中、平成7年1月に届いた1本の電話は、その年の11月14日に私が南極に向かって出発するき

かけとなりました。南極越冬501日の始まりです。厚さ3,000mの氷床掘削で過ごした日々は鮮明に思い出されます。これもお仕えていた一ノ瀬教授はじめ当時の同僚という人脈があったからに他なりません。

年金生活となるこれからの時間は、高齢化社会、大気汚染、地球温暖化など枚挙に暇が無い程の暗い未来ですが、あきらめることなく「感動と好奇心」を抱き、ものずき人間で過ごせるかどうか興味津々です。

在職される皆様にあっても、悔いの無い人生を過ごすため、健康第一に活躍されることを期待して止みません。お世話になりました。



南極男

退職にあたって

退職にあたって

学務課・技術班副技術長 大塩 稔

既に退職された先輩から「片手をきったら早いよ」と言われたとおり、定年までの5年間はあっという間だったように思います。

前任の新潟大学工学部から本学に来て26年が経ちました。当初は実験装置や器具も少なく、大学の運転手さんと泊りがけで企業に貫いにいったことが懐しく思い出されます。

技術職員は学生と接している時間が長く、いつも若い人達と過ごせたことが、大変幸せだったと思っています。北海道から九州までの全国の高専、高校、大学、短大からの学生、また世

界各国からの留学生等、大勢の方々と知り合いになり一時期を過ごせたことを光栄に思っております。皆さん、卒業後は社会人となられて素晴らしい活躍をされています。そういった方々に少しでもお手伝いできた事は喜びもひとしおです。

本学がこれからも益々発展し、有為な人材を社会に送り出し続けることを確信いたしております。

原田秀樹先生をはじめ、多くの皆様方の暖かいご指導、ご鞭撻をいただきまして、何とか定年まで勤めることが出来ました。ここに厚く御礼申しあげます。



執事近影

退職にあたって

木々が語りかける本学の歩み

総務部長 山道 正光

(時の流れ)

顧みますと、東京オリンピック開催年の昭和39年に東京大学に大学職員としてその一歩を踏み入れて以来、多くの大学等の機関に在籍させていただく機会に恵まれました。これまでの体験の中で、昭和44年1月「封鎖中の東京大学安田講堂」に機動隊が出動し、占拠学生を撤退させた出来事や、昭和49年文化庁在職時に「東大寺大仏殿、昭和の大修理」が行われている中、工事用エレベーターで地上約60メートルの高所で現場視察したこと、そして、平成16年10月突然襲った「新潟県中越地震」から得た教訓と地震対策本部で着の身着のまま奔走した1週間余りの本学での貴重な体験が、今も脳裏から離れることもなく、過ぎ去った時の流れを実感しております。

(木々との歩み)

この3月で本学を含めての在職が40数年になります。初めて長岡技術科学大学を訪問する機会に恵まれたのは、創設間もない昭和55年3月のことで、それ以来20数年の歳月が経過しております。構内には、当時に比べて所狭しと大きく成長したサクラ、ケヤキ、トチノキ、スズカケノキなどの木々が、本学がこれまで国内外に果たしてきた役割や社会の変遷とともに歩んで

きた歴史なるものを小職に語りかけている思いがします。これからも成長を続けるこれらの木々に、本学の充実、発展の歩みを末永く見守って戴きたいものであります。

(心待ち)

市街地から約10キロ余り離れている本学は自然環境に恵まれ、教育研究を行う環境としては最適な場所であると思っております。ただ、構内周辺を散策する折りに、周辺の生活環境面に一つの物足りなさを感じております。向学心に燃え本学で学び将来を嘱望されている学生に、潤いのある日々を過ごして戴くためにも、周辺地域の活性化が進み、多くの方々の交流の輪が広がって、その中で明るく清々しく往来する学生の姿を見受けられる日が訪れることを心待ちにしております。

(地域とともに)

最後に、改めてご支援ご指導を賜りました関係各位と本学が最終の勤務機関になったことを終生の誇りとし、衷心より感謝と御礼を申し上げます。

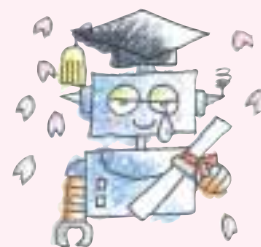
今後、長岡技術科学大学が今以上に地域の方々に愛され、教育研究活動がより一層充実、発展されますことを祈念申し上げまして、定年退職に際してのご挨拶とさせていただきます。いろいろお世話になりました。



東京大学先輩諸氏らと(筆者中央)
(東京芸術大学美術展会場にて)

2006 SPRING

卒業・修了おめでとう。



平成17年3月 卒業・修了者数

工 学 部	卒業者数	大学院工学研究科			
		修 士 課 程	修了者数	博士後期課程	修了者数
機械創造工学課程	100	機械創造工学専攻	87	情報・制御工学専攻	7
		機械システム工学専攻	3		
		創造設計工学専攻	1		
電気電子情報工学課程	121	電気電子情報工学専攻	81	材料工学専攻	10
		電気・電子システム工学専攻	2		
		電子機器工学専攻	2		
材料開発工学課程	47	材料開発工学専攻	35	エネルギー・環境工学専攻	10
建設工学課程	46	建設工学専攻	35		
環境システム工学課程	48	環境システム工学専攻	48		
生物機能工学課程	43	生物機能工学専攻	41		
経営情報システム工学課程	35	経営情報システム工学専攻	31		
計	440	計	366	計	27
		論文提出により学位を授与されたもの			4

編集後記

卒業生・修了生の皆さん、おめでとうございます。1年半前の中越地震では大変なご苦労されたことでしょう。一人一人がそれを乗り越えて今日に到られたことを感慨深く思っています。就職で新潟県を離れる方も多いと思いますが、被害の大きかった地域では未だ復興まなぬ人たちが大勢います。そういう人たちのことを心に留め置きつつ、今後の人生を歩んでいただきたいと思います。私事ですが、本号を以ってVOS編集委員を卒業することになりました。何人かの方々には原稿の執筆で面倒をおかけしましたが、皆様のご協力で何とか勤めを果たせたかと思えます。ありがとうございました。(編集委員)



VOS132号(平成18年3月)

編集発行/長岡技術科学大学広報委員会(総務部 総務課)

*本誌に対するご意見等は下記までお寄せください。

〒940-2188 長岡市上富岡町1603-1

Tel.0258-47-9209 Fax.0258-47-9000

E-mail skoho@jcom.nagaokaut.ac.jp

U R L : <http://www.nagaokaut.ac.jp/>

VOSの由来

本学のモットーである,Vitality,Originality, Servicesの頭文字をとって,本学初代学長の故川上正光氏により名付けられました。

2006年10月1日
開学30周年を迎えます。